

特集にあたって

～少子社会と高齢出産～

母子愛育会 総合母子保健センター 愛育病院 安達 知子

はじめに、日本産科婦人科学会編集の「産科婦人科用語集・用語解説集」には「高年妊娠」、「高齢妊娠」という用語はなく、高年初産婦という用語のみが認められる。これは35歳以上の初産婦を定義するものであるが、一般社会では高齢妊娠、高齢出産などの言葉が広く使用されている。本特集では、高年齢の妊娠や出産を高齢妊娠、高齢出産と呼ぶことに統一した。

少子社会の中で高齢・ハイリスク妊娠出産は増加し、周産期にかかわる医師やメディカルスタッフの果たす役割は益々大きくなっている。

第二次ベビーブーム(1971～1974年)が終了した1975年の出生数は約190万人であったが経年的に減少し、2018年の時点で918,397人と50%未満となった。一方、出産ピークの母体年齢は20歳代後半から30歳代前半に移行し、高齢出産といわれる35歳以後の母からの出生数は71,709人から263,938人へと増大した。その結果、35歳以降の母から生まれるこどもの割合は3.8%から28.7%を超えるまでになった(厚生労働省「人口動態統計」)。この背景には、晩婚・晩産のほか、生殖年齢の人口が経年的に

減少していること、生涯未婚率が増加していること、および生殖補助医療(assisted reproductive technology: ART)の進歩が大きく関与している。

しかし、妊産婦死亡の頻度は、母体年齢24歳以下に比較して、35～39歳で4.5倍、40歳以上で6倍以上に増加するとの調査分析がある。35歳以上では、子宮筋腫などの婦人科疾患ばかりでなく、高血圧、糖尿病などの全身疾患の有病率が上昇し、吸引・鉗子分娩や帝王切開などの産科手術も増加する。一方、母体死亡の原因である分娩時大出血、産科的塞栓症、妊娠高血圧症候群なども高齢妊娠で増加するが、周産期死亡(妊娠22週以降の胎内死亡および早期新生児死亡)も増加する。自然流産、児の先天異常や染色体異常の頻度も高齢妊娠では高い。

35歳を過ぎると自然妊娠はしにくくなり、38歳を超えると不妊治療の成功率は低くなる。卵子は加齢の影響を受けやすく妊娠率は低下する。ARTを用いても43歳を過ぎると妊娠率は低く、2017年の日本産科婦人科学会のデータでは、43歳で流産率はほぼ50%、生児を授かる確率は3.1%ときわめて低い。

Introduction.

Tomoko Adachi (院長)